

## 『日本軍兵士』

2018年05月03日

日本が起こした先の大戦は、米国と戦って敗戦したという印象が強いが、正しくは、朝鮮、中国、台湾、東南アジアを植民地化したことに起因する戦争であった。米国はじめ多くの国々からの反発、経済封鎖を受け、これを跳ねのけようと米国との戦争に挑んだのである。戦争は1941年の真珠湾攻撃からでなく、1937年の盧溝橋事件の日中戦争から始まっている。だから「アジア・太平洋戦争」と言うのである。日本戦史の研究者の吉田裕氏が『日本軍兵士—アジア・太平洋戦争の現実』を上梓している。吉田氏は、旧陸海軍の幕僚将校だった戦史編纂官が書いた『戦史叢書』は軍中央部からみた戦争指導史で、戦場の現実を反映していないから、「兵士の目線」「兵士の立ち位置」、元兵士で俳人の金子兜太氏のいう「死の現場」から再構成しようと、本書を著している。

日本人の戦没者数は、軍人・軍属が230万人、民間人が80万人、合計310万人と言われている。戦没者は戦闘による死者と病気による戦病死者の合計である。戦闘による死の惨さ、無念さと言うまでもない。戦争の末期1944年以降の戦病死者は73.5%にもなり、全体では61%にも達すると推測される。(秦郁彦氏は37%と提示している。)栄養失調による体力消耗の結果、マラリア、赤痢などの感染による死と餓死である。更に、ストレス、緊張や恐怖などの戦争神経症で、拒食症になり、身体が生きることを拒否し、死んでいく。彼らの苦悩、望郷への思いは察して余りある。艦船が攻撃され、海没死者は35万8千人に達し、海に投げ出された兵士が浮遊物にすがりつこうとした腕を切り落とされ、水中爆傷を受けた者は肛門からの水圧で腸壁が破れて悶絶死する。自らの命を捨てる特攻隊が編成され、小型艦艇を沈没させたが、死者は3,848人に及び、期待し、宣伝されたほど、戦果をあげることはできなかった。彼らは、自分の死の意味を見出すことに必死であっただろう。10万人に対し30人強の軍人、軍属が戦争の恐怖、上官の私的制裁に耐えられず自殺した。「生きて虜囚の辱めを受けず」の戦陣訓に基づく自決が求められた。負傷兵には自決を促し、できない者には「処置」という名の殺害、食料を争奪するための殺人、人肉を常食とするまで、兵士たちは追い込まれていた。

戦争末期には、無謀な戦争と厳しい軍紀に反抗し、上官の命令に対して、不服従、暴力、脅迫などの上官犯が増大し、逃亡や奔敵(敵側への逃亡)が起こった。中国戦線では、中国側の思想工作を受け、共鳴して敵に投じ、反戦活動などの「利敵行為を敢行するに至るもの」が多かった。下級兵士が多数の兵士を抱き込みボスの存在になり、隠然たる勢力を形成し、幹部は威圧されて「微温的態度」で臨むほかなかった。軍紀の弛緩と頹廢は当然の成り行きを生んだ。これらの反抗は首肯できる面もあるのではないか。

吉田氏は、日本の軍事思想の特徴を3つあげている。① 長期戦を回避し「短期決戦」「速戦即決」を重視する作戦思想が主流を占めた。② 「作戦至上主義」で、それは、補給、情報、衛生、防禦、海上護衛などが軽視されたことと表裏の関係にある。③ 極端な「精神主義」である。砲兵などの火力や航空戦力の充実、軍の機械化や軍事技術の革新などに関心を払わず、精神的優越性を強調する風潮を生んだ。また、近代戦は国家総力戦であるが、軍部は「統帥権の独立」を楯にとって、政府によるコントロールを排除し、国家意思を統一できなかったことに根本的な欠陥があったと分析している。更に、「日本軍礼讃本」が目立ち始めているが、そんな風潮があるからこそ、戦場の凄惨な「死の現実」を直視する必要があると訴えている。